

# 2019年度 入学試験 **国語** 問題冊子

早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、下記の注意事項をよく読んでください。

## 注意事項

1. 問題は、本冊子の p. 1～p. 24 となります。
2. 解答は、別紙の解答用紙に記入してください。
3. 「始め」の合図があるまで、問題冊子、解答用紙を開かないでください。
4. 監督者が「始め」の合図をしてから、問題冊子と解答用紙に、受験番号と氏名を記入してください。
5. 解答中に何か用事がある場合は、黙って手をあげてください。
6. 解答中に問題冊子や解答用紙の汚れ、印刷の不鮮明な箇所に気付いた場合は、黙って手をあげ監督者に申し出てください。
7. 「止め」の合図で筆記用具を置き、監督者の指示に従って解答用紙の回収を待ってください。
8. 問題冊子も回収します。持ち帰らないでください。

### ※ 解答上の注意

文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさと・濃く）記しなさい。  
字画（漢字を構成する点や線）が認められない場合には、不正解または減点の対象になります。

受験番号						氏名





□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

異文化を体験するとは、本質的にどういうことでしょうか。それは、異質な時間と空間を体験することにはかなりません。異文化の空間が違うのはいわば当たり前といえるかもしれませんが、時間が異質だと言うのは、別に「時差」のことを指しているわけではありません。時間の認識とか感覚に違う面があることを意味します。

たとえば、<sup>1</sup> 私たちがいま普通に認識している近代的な時間は、「時計の時間」ということができます。昨日から今日へ、今日から明日へ、限りなく直線的に前に前に進む時間で、限りがありませんし、引き返すこともできません。その近代的な時間を生きる私たちの生活も仕事も、引き返すことが出来ない、前進するしかしようがない時間の中にあるわけです。

しかし、古代ギリシアや古代インドでは、明らかに時間は違った流れ方をしていました。古代ギリシアでは、時間は振り子のように行っては戻るもので、繰り返すものと考えられていました。また、古代インドの時間は円環的にぐるりと回ってくるものでした。この二つの時間の考え方からは、時間が繰り返すものであるために、何らかの意味で人生にも繰り返しがきく、引き返せるという感じ方が **a** 芽生え、それが古代ギリシアや古代インドの文化に穏やかさとか悠久のイメージを与えているように思います。

時間が繰り返すという考え方は同時に、必ず始まりと終わりがあ、とりわけ「時間が一度終わってしまう」という発想を芽生えさせます。この発想はキリスト教の「最後の審判」を預言する終末論に **b** テンケイ的な形で出てきます。仏教でも、五六億七〇〇万年という時間が過ぎると登場してきて救済をする未来仏、**弥勒菩薩**について語られています。やはり終末論と言っていていいでしょう。

古代ギリシアや古代インドの時間認識は、実は近代的な時間認識の中にも存在しないわけではありません。

現在、暦では確かに多くの国で西暦が採用されていますが、タイなどの仏教国では仏陀が亡くなってからの年月（仏暦）でも数えていますから、二〇世紀末といった数え方とは違う時間認識があるわけです。また日本にも皇紀何千年という言い方が

かつてはあり、いまでも使われている元号は、明治以降は時間を天皇の在位期間で区切る考え方です。天皇が亡くなると日本の時間は一応そこでとぎれて、次の天皇が即位すると新しい時間が生まれてくる。いわば、天皇の生命と時間の持続が重ねられているわけです。

王の身体がその国の時間を支配している元号のような考え方は、国家や社会の生命は王の生命と同義である「王の身体説」に基づくものですが、こうした考え方は現代世界でも比較的力量を持っている考え方です。たとえばタイの王様が八〇年代初めに心臓病でかなり重態になられたことがあったのですが、その時タイの株価が下がりました。それは多くの人が王の病気でタイの国力が弱ると感じたということなのです。現代風に説明するならば、王がいるからタイ社会は安定している、王がいなくなったら社会は混乱しタイ経済が危なくなる（したがって株価は下がる）ことなのですが、いずれにせよ王の身体説はまだ力を持っていると見ることができると言えます。日本でも昭和天皇の病気を国中で心配したことを、アザやかに思い出しますが、そこにはやはり「王の身体説」が働いていた面があると思います。王の身体の如何いかんは国と国民の運営に重なるという考え方です。ですから、現代の日本や経済発展したタイ社会の現在を見ると、これは近代社会であり人々は近代の時間を生きていると思います。日本にもタイにも <sup>2</sup> 近代的時間とは別のいわば象徴的な時間があり、二通りの時間が流れているとみなすことができる と思います。日本とタイ以外の多くの文化でもそれを見出すことはできるでしょう。そして、近代的時間と違ったもうひとつの時間認識を生み出したものこそがその地域や社会固有の文化なのです。その文化の時間を知ることが、異文化理解のうえでも非常に重要なことになるわけです。

異文化を体験し、そこで時間がさまざまに流れている、日本の日常生活とは時間の流れ方が違っていると気づくことは、異文化理解のためだけではなく、私たちが自分の人生を生きていくうえでも非常に重要なことのように思います。

たとえば場所が違えば社会的な時間のありようからして違います。昔はよく「タイ時間」などと言って、約束した時間に二時間は遅れていかないと何も始まらないとか言われたものでした。「ブラジル時間」とか「メキシコ時間」とか、同じような言い方が世界各地についてあったものです。タイ時間などは現在のタイのような経済発展の社会では徐々になくなりつつある

と思われませんが、香港に行ってもタイに行ってもスリランカに行っても、食事時間というごく基本的なものからしてそれぞれ日本とは違うことに気がつきます。そしてそれが各社会を実際に動かしているわけですから、時間が各文化の中でどうなっているのかを学ぶことが非常に重要になってくるのです。

しかし、ここで私自身が経験し、また貴重なことと感じる異文化における時間の流れ方の意味ということでお話ししておきたいのは、「夕刻」という時間についてです。一日の中で昼はおわったがまだ夜にはならない夕刻という、狭間であり一種の境界である時間は、仕事と憩いの、公と私の境目の時間に当たります。よくホテルでは、ラウンジでピアノが流れる「ハッピー・アワーズ」とか「カクテルの時間」を設けていますが、夕刻を過ごすのにちょっとした儀式があつて、その時間を上手く間をもたせて夕食につなげる工夫をしています。

それは伝統的な社会でも同じで、<sup>3</sup> タイやスリランカでは、夕方には多くの人々は仕事を終えて、夕食が始まる前にお寺に行き、お花とか水を捧げます。スリランカの仏教徒の間ではそれを「ギランパサ（夕方の水かけ儀式）」<sup>4</sup> と言い、サリーに身をつつんだご婦人たちを中心に、男性、老人、子どもたちが手に手に水差しと花を持って集まり、僧による読経を少し聞いた後、「サートゥ」と唱えつつ合唱しながら、菩提樹や仏塔に花を捧げ、水を振りかけるのです。スリランカの仏教徒は、この小一時間ほどの夕べの儀式を終えて初めて、「ビジネス・アワー」とは違った、私的な夜の時間を迎えていました。私もコロンボにいるときは、よくこの時刻にお寺に出かけギランパサに参列しました。それはまことに充実した夕刻のひとつと感じられました。

日本からアジアのさまざまな社会に行つて、人々がそういう夕べの儀式を行なっているのに接すると、私自身何かほっとするものを感じます。

私たちの現代日本社会は、のべつまくなしに日常の仕事の時間が全体を<sup>d</sup> 覆つており、朝起きてから夜寝るまで、「境界の時間」がどこにも設定されていません。人生という視点から見ても、たとえば成人式などの意義はなくなっています。「成人の日」はありますが「境界の時間」を過ごす日ではもはやありません。結局、現代の直線的な時間に裂け目を作る装置がな

いために、日本社会はゆとりのない、緊張なくめの社会になってしまっているとも感じられるのです。だからスリランカに行つてギランパサを見たり、夕刻の紅茶の時間を過ごしたりすると、ほっと充実した気持ちになるのです。

日本でも近代以前には生活の中に「境界の時間」にあたるものが組み込まれていたのですが、近代化と都市化のプロセスの中でほとんど失われてしまいました。今では異文化に接することによって、その中に自文化にないものを見つけしていくしかなくなっているわけです。

異文化を理解することの意義は、ひとつには自分たちにはないものをその中に発見して、それが自文化ではどうしてなくなつたんだろうとあらためて考えさせずにおかないところにもあるように思えます。これは異文化が単にももの珍しい存在というだけではなく、自文化を見直す機会としてもあるということです。また、私たちの時間は、近代的な時間に支配されてしまっているのですが、異文化に接することによって違う時間があることを発見することができます。違う時間に接することで、事物を視る眼が e コウチヨクせず、緊張しきつた心が穏やかになり、豊かになるはずですが、あるいは自分たちが生きる意味も、異文化と出会い、自文化を捉え直す作業の中で見出されるのではないのでしょうか。

(青木保の文章による)

問一 傍線部 a く e のカタカナを漢字に、漢字を平仮名に改めなさい。その際、次の【条件】にしたがうこと。

【条件】

・文字は、明確に（丁寧に・十分な大きさで・濃く）記すこと。

問二 傍線部 1 「私たちがいま普通に認識している近代的な時間」とあるが、これほどのような時間のことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過去から現在へ、現在から未来へと断続的に進んでいく時間。
- イ 過去から未来へと、時に揺らぎながらも前進し続ける時間。
- ウ 引き返すことができずに、未来に向かって前進し続ける時間。
- エ 私たちの生活のすべてを規定しながら直線的に進む時間。
- オ 一つの終わりが次の始まりとなって永遠に循環する時間。



問三 傍線部 2 「近代的時間とは別のいわば象徴的な時間」とあるが、これはどのような時間のことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近代社会における一元的な時間とは共存しがたい、その地域や社会固有の文化を象徴した時間。
- イ 近代社会における一元的な時間とともに流れている、その国の成り立ちや宗教が具現化された時間。
- ウ 近代社会における一元的な時間とは目的を異にする、その社会や地域の価値観を正確に反映した時間。
- エ 近代社会における一元的な時間と同時に存在している、国や地域によって左右されない普遍的な時間。
- オ 近代社会における一元的な時間とは性質を異にする、その地域や社会特有の文化が間接的に表れた時間。



問五 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 古代ギリシアや古代インドにおける時間は、人々に悠久のイメージを与えると同時に、一切の物事は変化して常住でないとする無常観をも植え付けた。

イ 王がいるからタイ社会は安定しているとすると、国家の生命を王の生命に重ねる「王の身体説」は、現代社会では力を失ってしまった。

ウ 日常生活における食事の時間の流れ方を知ること、その社会がどれくらい近代的な時間に支配されているかを測ることができる。

エ 自文化とは異なる時間の流れ方に接することで、物事の捉え方が多様になり、現代社会に生じている時間の裂け目を修復することができる。

オ 異文化に接し、異文化の中に自文化にないものを発見して、それが自文化にはない理由を改めて考えることを通して、自分たちが生きる意味も見出される。

二 国内の統一を果たした関白秀吉は、明国（今の中国）出兵を打ち出した。それに対し、茶道の大家としてだけでなく、秀吉の政治・軍事の相談役として発言力を強めていた利休（＝宗易）が反対の意を表明したところ、秀吉は利休を激しく罵倒した。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

利休はふかく垂れていた頭をあげた。今日まで浴びた覚えのない下卑た雑言が、かえって不敵に腹をきめさせた。利休は落ちつき払って上段の間を見あげた。そこにある秀吉の斜かいに吊った眼尻、眉根のあいだの豎皺でまっ蒼になった顔は、いつそ彼のほうが罵り辱められたものであるかのごとく見えた。

「このたびのことにつきまして、いかようにお叱りを受けましようとも、ただ宗易の不覚の致すところで、重々おわびを申しあげますほかはございませぬ。」

利休は落ちつき払った面もちに劣らぬ静けさでいった。

「ただ唐御陣の儀は、今日までの合戦とはかわって相手はもろこしの異人、戦場は外地、いよいよ御渡海とも相なりますれば、荒海を犯しての御船出で、季節、天候の如何によりましては、お泉水をわたるようにはまいりかねましようかと存じられませぬ。」

「そんな心配は、女、子供のすることだ。」

「お言葉ではございますが、これは女、子供に限りはいたしませぬ。」

「なんだと。」

「畏れながら、大政所さまはすでに八十路の御老齢、いつぼう若君鶴松さまは、ようやくお二つになられたばかり。これによりまして上様の御身こそ日本のため、御家のため、お大切なうえにもお大切と存じあげますのは、押しなべての人のこころで、宗易、御勘気を蒙りますようなことを口にいたしましたのも、なによりまずはるばるの波濤を凌いでの御出征を御案

じ——」

「黙れ、黙れ」

秀吉は性急な叱咤しつたで中断させた。利休の言葉は奉行たちへはもとより気ぶりにも見せず、表向きのことまでうち明けて隠さない北政所（注6）きたのまんじょうなる禰々ねねとさえ、話題にしたがらないひそかな困惑をあげたに等しい。それは大政所の唐御陣に対するふかい憂慮であった。

これまでの合戦（注7）とても、吉左右きつそろうがわかるまでは、老母は食べものも咽喉のどに通らぬほどであった。とくべつ母おもいの秀吉はそれを心得ており、戦場にあつても、安心のいくような手紙を書くのを怠らなかつたが、唐御陣は、すでにいまのうちから大政所のところを痛めさせていた。これまでの合戦は昨年（注8）の小田原陣にしろ、かつての島津征伐にしろ、関東、筑紫ちくしと隔たつてもとにかく国内の出陣にとどまつたのに、今度は遠く荒海をわたつての外征であることが、心配のたねであつたのはいうまでもない。それ故、利休が口にした、はるばるの波濤をこえてのうんぬんは、大政所（注8）の懊惱おうのうを誤たず見ぬいた言葉となる。 2

そこが秀吉には癩しやくにさわつた。ほんとうであるだけ腹がたち、なお一方の相手が母親であり、くどくど嘆かれても a 高飛車たかひぐるまにはあしらえないで、宥なだめすかすほかはない苛いらだたしさも、利休への怒りに変質していた。

「おれのからだを、それ程にそちが心配するとは知らなんだ。」

秀吉はわざと皮肉に、声にならない嘲笑ちやうしやうで下半面をひん曲げた。

「だが、要いらぬ世話は焼くな。老いぼれは老いぼれらしくすっこんでいろ。すこし b 眼めをかけてやればいい気になって、なんだ、怪けしからん。いわでもものことをつべこべ吐ぬかす。」

それが明智討ちのようにはいかぬとした唐御陣への批判の怒りか、あるいは、大政所の心痛をずばりいいあてられたことへの憤りか、自らにもわからないまま、秀吉は睨にらんで喰くいしめた口をかつと犬のようにあけ、荒荒しく叫んだ。

「不屈ふくき者奴ものめ、面つらも見たくない。地獄のどん底に失せろ。」

利休(注1)が聚楽第(じゅらくだい)から帰るとまもなく、秀吉の使者として来た富田左近将監(とみたさこんしょうげん)、柘植左京亮(つげさきやうのすけ)の二人によつて、堺へ立ち去れとの命令が伝えられた。おもいのほかに軽いお咎め(とが)であつた。

退去にも利休は見事に振る舞つた。いつそうしたともなく用意がととのえられていた。それとて、身のまわりのもの以外は持ちださず、茶道具もほんの二、三のほかはことごとく残された。夕方、いち早く伏見にでて淀川下りの夜船に乗る時も、女たちとはわざと船をべつにした。昨日にかわる身をおもつての慎しみであつた。

利休自らにも意外とした懲罰(ちやうばつ)が、石田三成、前田玄以らに寛大に失すると考えられたのはいうまでもない。彼らに見れば、そんなことで終らせてはならず、またそれですむ性質の事件ではなかつた。彼らの不満は、堺への追いくだしは、やがて思いきり厳しい裁断が下されるまでの、一時の扱いに過ぎないことを、遠侍(とのおさむらい)あたりでも憚らず語らせた。同時に、その方は、おおっぴらにこそ口にしなかつたとはいえ、処罰には性急な関白様が、いつになく手ぬるいのはなにが原因であるかを、彼らははつきり見ぬいていた。

それは秀吉の一種のみれんともいうべき、利休に対する絶ちがたい執着であつた。あれほど散々にとつちめ、面も見たくない。地獄のどん底に失せろ、とまで怒鳴りつけてやつた男が、さて身边から消え去るとともに、いかに大事なものを失つたかが痛感された。むしろ、まことには失せていなかつた。<sup>3</sup> 利休は姿を消したことによつて、かえつて在つた時にもましていつそう秀吉とともにいた。

朝、いわば政庁である表座敷にでるまえ、内輪のものの挨拶を受ける時には、<sup>(注12)</sup> お伽衆(とがしゆう)や祐筆(ゆうひつ)らといつしよに、あのかたちのよい大頭と、にこやかな黒眼が見いだされそうに思われたし、見えないのは出仕がちと遅れているので、あとで小姓(こしやう)を呼びにやれば、詰所からさつそく現れて来るに違いない気がした。

秀吉は政務を見たあと、茶で息抜きをするのが好きであつた。そんな場合、<sup>(注13)</sup> どの数寄屋(すきや)へ足をむけようと、利休は前もつて知っていたかのように迎えいれ、彼のために日本一うまい茶をたてた。それ故、茶を飲もうかと思うことは、そこにはもういないはずで、なお在つて待つ利休を思うことであつた。

茶事にはかぎらない。こみ入った問題で、奉行たちの評議がなかなかまとまらない時など、とりわけそれが人事に関することだと、利休のかけからの力が大いに役にたつのを、秀吉は今さらに思い浮かべないではいられなかった。

「宗易、そちがひとつ当たって見る。」

この一令で、やっかいな縫もつれが存外かんたんに解けたこともめずらしくない。それがいまどうしてできないのか。利休屋敷はもとのまま黒い門、黒い板塀で、しんと静かに、みじん存在を変えていない。変わったといえ、空っぽになったのみであり、空っぽにしたのも、秀吉自らにほかならなかった。でも、罵ったように、地獄の底へ追い払ったわけではない。それどころか、三成あたりがひそかに期待した北国の離れ島でも、奥羽の僻へきち地でもなく、堺への退去命令は、いままでよりほんのすこしばかり隔たつた詰所へやつたに過ぎない。(注14)早飛脚はやびきやくなら、その日のうちにでも呼びよせられる。

しかも秀吉の執着は、親しみや懐かしみとは絶縁されていた。秀吉はかえって利休を憎んだ。今日の始末になってまで思いだされることのすべてが、彼の貴重さの証をなし、なくてはならぬものとしての、価値づけをあらたにする。この腹だたしさはいままでへの尊敬や、信頼や、愛護の念を胸壁から引きむしり、ただ熾し烈れつに憎むことに代えるほかは押さえようがなかった。こうして利休は毎日そばに在ったより、いつそう秀吉にびったり付きそつていた。

秀吉の気持ちにくらべれば、利休にはずっとゆとりがあった。

(注15)堺さかいでの蟄居ちつきよはなんらお咎めがなかったに等しかった。安心はもとよりそれにもとづいており、ふいな打撃にうちひしがれた最初の怖れや、困惑のあいだにもなおすっからは揺らがなかつた。(注16)自恃じじ、今度の刑罰ともいえない処置で、いつそう根固めをした。どんな事情においても秀吉は自分を手放しえないのを、利休はあらたに信じようとした。なお彼に対するひそかな田舎者扱いは別として、とにかく天下様にのしあがれるだけの卓抜な人間性には、疑いをもたなかったし、今日までの茶事に関するさまざまな独創を、たんにあたまの工夫にとめないですんだのは、秀吉があればこそだとする考え方も、以前に変わらないう。その意味から秀吉にとつてもそうであるように、利休にも秀吉はなくてはならないものであった。もとより、お城勤めは

利休をしばしばうんざりさせた。一人の男の庇護ひごのもとで、御機嫌の照り曇りにたえず支配されて生きるうるささ、味気なさは、もう沢山だ、とおもったものだ。でも、<sup>4</sup> 顔の映る面のみが鏡ではない。同じように利休のこころの裏側の面には、表側の彼自らがまことにそう思い、人にも語る思いとは別な心象があらわれた。

利休にはまだやって見たい仕事の多くがあつた。秀吉のあたらしい(注17)伏見城は、利休にもあたらしい望みをもたせた。あの松山に湧くゆたかな泉を利用することで、いままでとはがらりと趣を変え、唐宋の文人画に見る水亭ふうなものにしたらしい。そ面白いだろう。利休はこんなことも考え、それには秀吉も乗り気になるのを知っていた。

(野上彌生子『秀吉と利休』による)

(注) 1 唐御陣——明国への出兵のこと。

2 お泉水——庭園などにある泉の水のこと。

3 大政所——ここでは、秀吉の母親のこと。

4 御勘気——目上の人の怒りにふれて、とがめを受けること。

5 波濤——大波。

6 北政所なる禰々——「秀吉の正妻である禰々」の意。

7 吉左右——善悪、正否いずれかの知らせ。

8 懊惱——悩み苦しむこと。

9 聚楽第——秀吉が都に造営した政庁と邸宅を兼ねた広大な建物。

10 石田三成、前田玄以——ともに秀吉政権下における有力な臣下。

11 遠侍——屋敷の主殿から離れた詰所。



- 12 お伽衆や祐筆——「お伽衆」は政治や軍事の相談役を務めた職。「祐筆」は文書や記録を務めた職。
- 13 数寄屋——ここでは、茶室のこと。
- 14 早飛脚——「飛脚」は書状や貨物などを輸送する職で、「早飛脚」は特別に急を要する飛脚のこと。
- 15 蟄居——出仕、外出を禁じ、自宅に謹慎させる刑。
- 16 自恃——自分自身を頼みにすること。
- 17 伏見城——秀吉が伏見に築いた城で、中に置かれた茶室には利休の趣向が色濃く反映された。

問一 傍線部 a ㄿ c の本文中の意味として最も適当なものを、次の語群のアㄿオの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 高飛車に

- ア 相手を慰めるように
- イ 相手を軽蔑するように
- ウ 相手を威圧するように
- エ 相手を褒め称えるように
- オ 相手を無視するように

b 眼をかけて

- ア 特別に注意して見て
- イ あえて気づかぬ振りをして
- ウ かわいがって面倒をみて
- エ やさしく励まして
- オ 大切にもてなして

c おおっぴらに

- ア 大きな声で
- イ 直接会って
- ウ おもてだつて
- エ おおざっぱに
- オ 必要以上に

問二 傍線部1「利休は落ちつき払って上段の間を見あげた。」とあるが、「利休」はなぜこのような態度を取ったのか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かつて経験したことのない口汚い言葉を浴びせられたことで、逆に決意を固めたことに加え、感情を抑えられずにいる秀吉が余裕を失っていると気づいたから。

イ 今まで見たことのない秀吉の激しい怒りは、自分に対してではなく、大政所への鬱屈うっくつした想いの八つ当たりだったことを察し、急速に忠誠心が薄れたから。

ウ 秀吉が怒りにまかせて悪態をつくのは、激情的な性格による一過性のものだということを今までの経験から見抜いていたから。

エ 尋常でなくくらい怒りをあらわにした秀吉が実は自分の意見に大きく動揺していることを見抜いたが、そのことを悟られたくなかったから。

オ かたくなに主張を貫こうとする秀吉の傍若無人ぼうじやくぶじんぶりに、揺るがぬ強い決意を持った天下人としての姿を見出し、畏敬の念をもったから。



問四 傍線部3「利休は姿を消したことによつて、かえつて在つた時にもましていつそう秀吉とともにいた。」とあるが、こ

こにおける「秀吉」についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 利休の茶室を訪れ、政治に関する様々なことを相談するのが常であつたのに、都から追い出すという処罰により貴重な相談役を失つてしまったので、利休のいない聚楽第で難解な問題が起こるにつけて、すぐにでも堺に早飛脚を出して呼び出したいという思いにさいなまれている。

イ 茶事に限らず政治などの込み入つた問題の相談役として利休を重宝していたのに、明国出兵に対する利休の無礼な態度を見逃すことができず堺に退去させたところ、他の臣下では利休の代わりを務められないことが実感され、唯一無二の存在として利休のことを思い返している。

ウ 明国出兵に反対の意を表明された以上、他の臣下に対する体面を保つためにも利休に処罰を下さないわけにはいかなかつたが、今になって思い返せば自分の思いを誰よりも理解してくれる利休の存在は不可欠であるので、憎しみを感じつつも利休への愛着を捨てきれないでいる。

エ 自分にとっての利休は、複雑な問題に対して背後から助力してくれる存在であつたのに、堺に追い払つたことで、その役割の貴重さがいやがうえにも実感され、厚い信頼を寄せていたからこそ今となっては激しい憎しみが沸き上がり、より強く利休を意識している。

オ 自分にとって利休は茶事だけでなく、政治面においても掛け替えのない存在であつたがゆえに、他の臣下たちを取り込んで明国出兵に反対されたことに関しては、全幅の信頼を裏切られて憎らしく思う一方で、共に過ごした日々の面影を懐かしく思い出している。

問五 傍線部4「顔の映る面のみが鏡ではない」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 利休は、表向きは秀吉の顔色を常に伺うような生活の窮屈さを疎ましく感じ、周囲にもそう漏らしているが、実際には自分の理想を実現するためには秀吉の存在が欠かせないものと自覚し、頼りにもしているということ。

イ 利休は、自分の理想を実現するためには秀吉の力に頼らざるを得ないことを十分に理解していたが、その一方で秀吉に支配される人生にうんざりしていることを薄々感じ始めてもいるということ。

ウ 利休は、表面的には秀吉の庇護の下で堅苦しい城勤めに飽き飽きしているように見せながら、本心では秀吉の人間性に魅せられ、秀吉と共に仕事をすることに喜びを見出してもいるということ。

エ 利休は、秀吉に支配され、その機嫌を伺わなくてはならない生活を嫌っているように振舞っているが、実は田舎者から天下統一を果たした秀吉の人間性を怖れ、妬<sup>ねた</sup>んでもいるということ。

オ 利休は、秀吉の人間性と権力があってこそその自分であることをはっきりと自覚しているが、秀吉に依存した生活から脱したいと、無意識に考えるようになってもいるということ。

〔三〕 次の文章は『土佐日記』の一節である。作者は土佐（現在の高知県）へ国司として赴任し、その任期中に病気で娘を亡くした。以下は、国司としての任期を終え、京の自邸へ戻ってきた場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

家に到りて、門に入るに、月明あかければ、いとよく有あり様見まゆ。聞きしよりもまして、1 いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣なかがきこそあれ、一つ家の 2 やうなれば、望みてあづかれるなり。さるは、たよりごとに物も絶えず得えさせたり。今宵こよい、「かかること」と、3 声高こゝろたかにもものもいはせず。いとつらく見ゆれど、（注） 志こころざしはせむとす。

さて、池めいて窪くぼまり、水つけるところあり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千歳ちとせや過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生おひたるぞまじれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「X」とぞ、人々いふ。

思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子をむなごの、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人ふなびとも、4 子たかりてののしる。かかるうちに、なほ、悲しきに堪たへずして、5 ひそかに心知れる人といへりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しき

とぞいへる。

（注） 志——お礼。

問一 傍線部 1 「いふかひなく」・ 4 「子たかりてののしる」の解釈として最も適当なものを、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

1 いふかひなく

- |              |         |         |          |          |
|--------------|---------|---------|----------|----------|
| ┌──────────┐ |         |         |          |          |
| ア            | イ       | ウ       | エ        | オ        |
| 差し支えなく       | いい加減でなく | 言いようもなく | 大したことはなく | でたらめではなく |

4 子たかりてののしる

- |                 |                 |                 |                |                |
|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|
| ┌──────────┐    |                 |                 |                |                |
| ア               | イ               | ウ               | エ              | オ              |
| 子供たちが大声で叫び合っている | 子供たちが作者をからかっている | 子供たちがしきりにねだっている | 子供たちが同情して嘆いている | 子供たちが集まって騒いでいる |

問二 傍線部 2 「やうなれば」を、現代仮名遣いに改めなさい。



問三 傍線部3「声高にもいはず」は「従者たちに大声でものを言うことをさせない」という意味だが、作者がたしなめた、従者たちの言葉の内容として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 家を預けている間、折に触れて物を送ったりしていたのに、このように荒れたままにしておくなんて、あんまりではないか。

イ 家をきれいにしておくようにと手紙を出していたのに、このように荒れたままになっているなんて、いったいどういうことだ。

ウ 家の様子が思った以上に荒れ果てていて驚いたが、これは家というものが次第に主人の心に似てくるので仕方がない。

エ 家を留守にしていたためにこのように荒れ果ててしまったことは手紙で知っていたので、後ほどお礼をした方がいい。

オ 家を管理する者が困窮しており十分に手入れができなかったので、このように荒れたままになってしまったのだろう。

問四 空欄

X

に入る「しみじみと悲しいことだ」という意味の古文単語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あはれ                   イ いみじ                   ウ うつくし                   エ 艶<sup>えん</sup>なり                   オ をかし

問五 傍線部 5 「ひそかに心知れる人」とあるが、これはどのような人のことか。その説明として最も適当なものを、次のア

～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 作者の悲しみをわかってくれている人  
イ 作者と長い間離れて悲しんでいた人  
ウ 作者の悲しみをなぐさめてくれた人  
エ 作者と同じ境遇にあつて悲しんでいる人  
オ 作者の悲しみにわけもなくもらい泣きした人

問六 本文中の和歌の説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久しぶりに戻ってきた我が家が荒れ果ててしまい、我が物顔で無造作に生えている松の木を見ることの悲しさを詠んでいる。

イ 長い間留守にしていた我が家に新しく生えた小さな松に、亡くした愛する娘を重ね合わせて見てしまうことの悲しさを詠んでいる。

ウ 帰ってくるつもりがなかったこの家には、小松がすでに新たな主人となっていたのだと、年月の無情な流れへの悲しさを詠んでいる。

エ 死別した娘が生まれ育ったこの家に一人で戻って来たところ、まるで娘の生まれ変わりのような小松が生えていたことへのかすかな喜びを詠んでいる。

オ 人はみな生まれては死ぬという運命にあるので娘もいつかは死ぬことが分かっていたが、娘の好きだった松を見るとやはり悲しさがこみ上げてくるという思いを詠んでいる。

問七 本文の出典である『土佐日記』は平安時代に成立した作品である。**これと成立した時代の異なる作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。**

ア 枕草子

イ 竹取物語

ウ 源氏物語

エ 伊勢物語

オ 徒然草

国語の問題は以上です。

